

■WAVE／子どもたちと一緒に走りながら	成瀬 美紀… 3
■アクセス ナウ！／校庭はリアリティのある学びの場	小澤紀美子… 4
■実践報告+講評と助言／4年生・とび箱運動	
・楽しみながら調整力を高める体育学習	原田 紀和… 6
・コーディネーション運動を組み入れた体育学習	東根 明人…10
■実践報告・サークル紹介／富山県射水市	
・1人ひとりが活躍できるなわとび運動	阿尾 昌樹…12
・サークル紹介：富山県小学校教育研究会射水ブロック体育部会	蒲田 浩二…15
■体育学習と副読本	
・授業を通して運動の楽しさにふれる	丸山 久志…16
■連載／外野席から〈第8回〉	
いじめと自殺を考える	岡崎 満義…18
■羅針盤〈第37回〉	
・座談会：近年の子どもの実態とこれからの体育	
	杉本眞智子／山口 隆夫／松田 恵示…20
■連載／育てようコーディネーション能力〈第8回〉	
・ボール運動のためのコーディネーション運動②	東根 明人…27

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



原田先生◆六合小学校には、千葉県下でもめずらしい100mのタータントラックがあります。順天堂大学の東根先生のご指導のもと、3年前からコーディネーション運動を取り入れた体育授業を研究しています。



丸山先生◆子どもたちの現状から、体育の授業を通して体力向上を図ることの重要性を感じています。1人でも多くの子どもたちに、楽しみながらいろいろな動きを経験してほしいと願って体育の授業を行っています。



東根先生◆小学校で授業を何度か行いました。子どもたちからたくさん感想文をもらい、喜びとともにあらためて意外な感想を子どもたちがもっていることに気づきました。やり方次第で、子どもたちはドンドン変わるのでね。



杉本先生◆小学校現場を離れて3年目になります。さみしいことに子どもたちと一緒に遊んだり運動したりできなくなったので、自分の体力と体形維持のため、自分なりのミニマムを設定し、日々努力しています!?



阿尾先生◆二重とびが初めてできたとき、初めてさか上がりで回ったとき、子どもころ運動ができるようになった喜びは、今でもはっきり覚えています。多くの子に「できる」喜びを味わわせたいと思い、研究を続けています。



山口先生◆子どもたちの指導や教育課程の編成で慌ただしく過ごしています。その中で感じるのは、「子どもたちが体育を楽しみにしている」ことです。すべての子どもたちにとって魅力的な体育とは何か？ますます大きな課題です。



蒲田先生◆社会科専門の私が、体育の魅力にひかれ、体育部会に所属して早十数年がたちました。運動の二極化が進むなか、子どもたちの成長が確かに見える楽しい体育と、生涯学習につながる体育と、生涯学習につながる体育と心掛けて実践しています。



松田先生◆「学芸大こども未来プロジェクト」という取り組みが忙しくなってきました。学校外教育を問題にしていますが、読者の先生方にも、大学のホームページ等を見ていただき、ご意見をいただけたらうれしいです。

私

は競技を中心に活動をしてい
ますが、一方で「子どもスポ
ーツネット」の一員として、
子どもたちにアドバイスしたり、実際
と一緒に走ったりする機会も増えてい
ます。これまでは自分の競技を中心に、
速く走ること、強くなることばかり考
えていましたので、子どもたちと一緒
に走っていても、いい指導をしている
のか、適切なアドバイスをしているの
かという点については、少し不安な部
分もあります。

幸いにも私が今まで接してきた子
どもたちは、みんな笑顔でさまざまな課
題に意欲的に取り組んでくれています。
そんな様子を見ることは私にとって新
鮮であり、実は私がいちばん楽しんで
いるのかもしれない。

今の私にとっては、上手な説明や指
導が大きな課題であります。1つの
信念を大切にしていきたいと思ってい
ます。それは、子どもたちに説明や指
導をする際には、子どもたちがスポー
ツの楽しさを実感し、さらに次の段階
に挑戦してみたいと思うような基本
的な体験と方向づけをしてあげること
こそが重要だということです。

私の場合、幸運なことに両親がダン
スやソフトボール、バスケットボール
などいろいろなスポーツを経験させて
くれたことや、先生が私の特性を見抜
いてくださったおかげで、陸上競技と
いうスポーツに巡り合うことができました。
子どもたちが何らかのきっかけ
でスポーツに出会い、そこから成長し

子どもたちと

一緒に走りながら



成瀬 美紀

ていく過程には、人との出会いや憧れ、
できたときの喜びなど、多くの有意義
な体験の積み重ねがあると思います。
今の子どもたちにも、ぜひとも多くの
機会をつくってあげ、たくさんの経験
を通して自信をもたせてあげることが
重要だと思います。

また、まだまだ競技に挑戦したい私
にとって、子どもたちに教えてあげる
ことで、子どもたちから教えてもらう
ことの多さにも気がつき始めています。
それは、競技である程度の結果が出て
から忘れかけていたものを、あるとき、
強く思い起こさせてくれたりします。

ある日、子どもたちとリラックスし
た姿勢を身につけるために、スキップ
からの走り出しの練習をしていました。
そのときに、なかなかスキップがうま
くできなかった子が、「これでいい
の?」と聞きにきました。コツを教え、
スムーズになったので、ほめてあげた
ら、その子は得意気にスキップをしな
がら帰っていきました。きっと家でも
うれしそうに披露したことでしょう。

今、私は子どもたちと一緒に走るこ
とで初心に戻ることができ、それが競
技を続ける原動力にもなっています。
スポーツを純粋に楽しむ子どもたちの
姿勢はスポーツの原点であり、最も大
切な要素だと感じています。今の私に
できるのは、基本的な走りのコツを体
感させてあげることだけですが、1人
でも多くの子どもが「走るこ
とって楽しい!」と感じてくれれば、と思っ
ています。

なるせ・みき 1982年岐阜県生まれ。岐阜県関市立関
商工高等学校から日本女子体育大学へ進み、現在、同
大学大学院スポーツ科学研究科2年に在籍。主な競技
実績及び自己ベスト：平成16年度天皇賜杯第73回日本
学生陸上競技対校選手権大会100m優勝、平成18年度
第90回日本陸上競技選手権大会200m 2位、200m自己
ベスト24"10 (2006.9.10)。主な研究業績：「女性競
技者の支援ニーズとサポートシステム」(第57回日本
体育学会)。現在、都内の小学校にてかけっこ教室の
指導を行う。

JWCPE「子どもスポーツネット」
<http://kids.jwcpe.ac.jp>

校庭はリアリティのある 学びの場



「大きな家」「小さなまち」としての学校

子どもは遊びを通して多くのことを学び、豊かな子どもの生活世界を築いていく。教室で机の前に座って学ぶだけでなく、子どもを取り巻くすべての「環境」が学びの要素となるのである。特に、子どもの「内なる自然」を豊かにしていくためには、質の高い学校空間が求められている。子どもは貧弱で人と人のかかわりを拒否するような空間に閉じ込められてしまうと、疎外感や嫌悪感を空間に対してだけでなく、そこを管理する大人に対しても抱くようになる。

昨今、子どもによるさまざまな事件が起り、そのたびに報道によって映し出される小・中学校の寒々しい校庭が、子どもたちの学びの場としてあまりにも貧相なことに驚かされる。

われわれが学校の建物や校庭を見るときは、校庭を取り巻く塀のそばから、たかだか1m20cmぐらいの目の高さで見ているので結構緑が多いと目には映る。さらに子どもたちの運動する姿も視野に入ってくるので、殺風景な景色とは思わず、学校空間の貧弱さに疑問すら浮かび上がらない。しかし、鳥の目で見るとテレビの映像では、コンクリートの固まりの校舎とアスファルト舗装の校庭、周りに申し訳程度に植えられた緑しか見えない。無機質で管理しやすい空間となっている。子どもたちにとって、わくわくする学びの場でもなければ、子どもの心のよりどころとなっているとも思えない。

埼玉県に、住まいの延長線上の空間としてとらえられ設計された小学校がある。「学校を多様な空間の集合からなる楽しいまちとしてとらえる。そこには山、丘、池があり、大きな瓦屋根、小さな瓦屋根の教室群を半屋外廊下で結ぶ道がある。教室はいろいろな機能をもつ住まいと考え、玄関、応接間、水場、テラス、庭をもつ。いたるところ

の柱や壁に打ち込まれたいろはがらた、天井に描かれた星座やちょうちょ、子どもたちが描いたガラス絵など、さまざまな工夫が施されている」。この言葉は、設計を担当した女性建築家が設計意図を説明したものである。

「記憶の装置」としての都市、「生きられた空間」としての都市が経済効率を優先し、歴史的・文化的な建物などが見るも無惨に破壊されていく日本の都市づくりにおいて、子どもたちはどこに居場所を求めたらよいのであろうか。居住地にあっても、子どもたちを取り巻く空間は、家の一歩外に出ると、荒々しい公共空間がむき出しで、安らぎのための緑や遊びのためのドキドキするような、あるいは仲間との豊かな交流を図ることのできる中間領域的な空間も消失している。いま学校空間に求められているのは、「大きな家」であり「小さなまち」としての空間ではないだろうか。

校庭づくりを通して (through) 学ぶ

学校空間は、子どもの生活の舞台であり、子どもを緊張から解放し、仲間と交流できる場でもあり、好きな場所でもある「居場所」でなければならない。子どもたちが大半を過ごす教室以外の学校空間、つまり校庭こそ、子ども固有の空間要求を満たし、子どもの目線と子どもの感性でとらえていく発想が求められている、子どもの「居場所」としてデザインされていなければならない。

校庭は単に体育や運動会のためにだけあるのではない。生態系に配慮した緑地や畑、ビオトープは、理科教育や生活科の学習の資源になる。屋外はアートギャラリーとしても利用可能である。それぞれの子どもの記憶に刻まれた場所は、卒業記念撮影の場にもなるであろう。

そこで、子どもたちの求めている居場所を子どもたち自身で気づき、何が必要かを考え、さまざま

まな価値観の対立・調整の過程を通してアイデアを練り、デザインを考え、子どもも教員も保護者も力を合わせて体を動かし、創造していく学びの機会と場が必要なのではないだろうか。

イギリスやドイツには、子どもたちが自らアイデアを出してデザインし、保護者と共に校庭を創り変えていく小学校、中学校、高校がある。

イギリスの学校は、70～80年代前半に非常に荒れ、いじめや非行が日常的であった。そこで「子どもたちの態度や行動は、学校の校庭のデザインや管理によって影響を受けている」という視点からの調査プロジェクトが推進され、校庭も含め学校空間が子どもたちに対して拒否的・否定的な空間となっていることをふまえ、学校空間全体を改善することが提案されたのである（英国教育・科学省編、IPA日本支部訳『アウトドア・クラスルーム—遊びから環境教育までの校庭づくり』、公害対策技術同友会）。

「校庭改善を通して学ぶ」とは、子ども自身が参画して魅力的な学びや遊びの場として校庭を改善することにより、子どもたちが質の高い豊かな空間で過ごしながらか、学校に対する誇りや帰属感を育み、リアリティのある学びの場を創造していきこうというものである。すなわち環境学習として、子どもたちの参加のもとに校庭のデザインを考え、実際に造園家やデザイナー、保護者などの参加・支援も得ながら校庭改善を行う活動であるが、デザインプロセスを通じて表現力を育て、校庭改善により魅力的な学校空間を創り、子どもたちに誇りをもたせ、自尊感情を育てることができる。

子どもの未来は決して閉塞的ではなく、身近な環境改善の実践の場として校庭づくりを行うことにより、子どもたちは自分たちに「環境を改善する力」があることを知り、未来に夢を育むことができる。さらにデザイン過程はJ. デューイのいう反省的思考過程に通じ、子どもたちが一方的に教え込まれ、大人の枠にはめ込まれていく学びではなく、自ら考え、判断し、行動し、さまざまな人とかかわりから学ぶ体験を紡ぐ実践の場となるのである。学校空間、特に校庭は、子どもの学び、成長と共に変化していく環境であってもよいのではないだろうか。

校庭改善学習の実際

子どもたちは「まち歩き」によって環境に対する評価（好き・嫌い）やまちの色の構成を調べ、自然と人工的な色の違いなど、子どもそれぞれに見方や考え方に違いがあることを学習する。さらに、専門家の支援を得て校庭改善のアイデアやプランを何通りか考え、最終的にどのデザイン案を選ぶか議論していく。1つのデザイン案に対して○か×ではなく、オルタナティブ（代替案）の発想をもたせるような学習展開がされている。

実際の校庭改善では、アスファルトをはがすのを保護者が支援したりするが、子どもたちも秘密の基地や隠れ家のトンネルは柳の木などを使って自分たちで造る。

そうしてできた校庭は野外学習の場に使用され、植えられた木々は樹木探しのオリエンテーリングのようなゲーム的な学習にも用いられる。生き物の観察小屋は保護者の手で造られ、校庭でできた果物は社会科学習の一環として販売される。校庭を案内するのも市民教育の一環として行われている。

こうした校庭改善を通して学ぶ方法はイギリスだけでなく、ドイツでも取り入れられている。特に、旧東ドイツにあった学校ではベルリンの壁崩壊後、「緑に学ぶ」というNGOの支援を得ながら子どもたちのアイデアで校庭改善の学習を実践している。表現力を高めるための円形劇場も校庭に造られている。

日本では大人の発想で校庭にビオトープを造り、子どもは利用するだけである。子どもの発想によってアイデアを出し、大人が支援者となって共に造ったり、子どもの数の減少によって空き教室が多いのであるから、空き教室を子どもたちのマイクラス（私の教室）としてデザインさせたりすることも可能であろう。

魅力的な学校空間づくりが子どもの閉塞的な状況を打ち破り、参加型・体験型で1つのことを共同で成し遂げたという感動と、質の高い空間から受け取るメッセージを共感できるヒドンカリキュラム（文化的背景も含む指導計画のない学習）としての効果が期待できるであろう。

※小澤研究室のHPアドレス
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~kozawa/>

楽しみながら調整力を高める体育学習

～コーディネーション運動を取り入れた授業実践を通して～

千葉県印旛村立六合小学校教諭 原田 紀和

はじめに

つい先日もマスメディアで、近ごろの子どもたちの体力低下が取り上げられていた。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもたちの体力・運動能力は、昭和60年代から現在まで低下の傾向が続いている。また、スキップができない、逆立ちができないなど、自分の身体の実行能力の低下が指摘されている。

これは、子どもたちがテレビを見たりテレビゲームをしたりする時間が長くなり、昔のように伸び伸びと外遊びをする機会が減っていることに関係がある。つまり、適切な時期に、適切な環境で、適切な運動をしていないがために、運動をするうえで欠かせない神経系や感覚器官などの発達が不十分になっていると考えられる。

その解決のためには、児童の発達特性を考慮しながら、運動が苦手な子どもたちに運動が好きになるように指導計画を工夫していくことが大切である。また、個に応じた指導を充実するとともに、創意工夫を生かした特色ある授業づくりが求められている。

そこで、体育の授業の中に「遊び」の要素を含んだコーディネーション運動を取り入れ、子どもが楽しく運動に親しんでいくことができれば自然と基礎的な能力が身についていくのではないかと考えた。

1. 実践について

(1) とび箱運動 (第4学年17名)

①児童から見た特性

いろいろな高さや向きのとび箱をとび越すこと自体が楽しい運動である。また、より高いとび箱をとび越したい、新しいとび方でとび越したいという欲求を子どもはもっている。しかしその一方で、開脚とびがうまくとべない児童もいるなど、

個人の能力差がはっきり現れやすい運動でもある。

②児童の実態・考察

とび箱運動に関しては、児童はこれまでに「開脚とび」や「かかえ込みとび」を学習してきた。意識調査によると、とび箱運動が「大好き」が3名、「好き」が6名、「ふつう」が5名、「嫌い」が3名であった。そのわけを聞くと、「好き」と答えた児童は、「とべると気持ちがいい」「とぶときにわくわくする」と答えている。それに対して「嫌い」と答えた児童は、「練習したけどとべない」「なかなかとべない」と答えている。

また、とび箱運動の授業でどんなことがしたいかを聞いたところ、「新しい技に挑戦したい」が7名、「今までの技をもっと上手にできるようにしたい」が7名、「今までより高い段でとびたい」が3名であった。あらかじめ児童の能力を調べたところ、かかえ込みとびが「できる」「とりあえずできる」は5名、「とび箱の上に乗ってしまう」は8名、「とび箱の前で止まってしまう」は4名であった。とび箱の前で止まってしまう児童は、両足踏みきりができていなかったり、とび箱に対する恐怖心があったりするためである。このように、児童の能力差が大きく、それぞれの課題も違っていることがわかる。

そこで、本単元では均質なグループを編成し、グループの中で励まし合ったり、教え合ったりして運動していくこととした。そして、とび箱に対する恐怖心を取り除くために、まずは、自分のできる課題から取り組んでいくようにした。そうすれば、児童も安心して学習していくことができ、できるようになった喜びも味わえるであろう。その結果、とび箱運動の楽しさに気づくのではないかと思われる。また、安全に運動ができるように、用具や周囲の安全確認をしっかりとさせ、安全に関する意識を高めていきたい。

【表1】「コーディネーション運動の時間」での運動

	リズム	バランス	連結	識別	変換
ケンパ遊び	●		●		●
リズムジャンプ	●		●		●
馬とび	●		●		●
うさぎとび	●		●		
足打ちボン		●	●	●	
手押し車		●	●		
壁倒立		●	●	●	
シーソー逆立ち		●	●	●	●
トントんジャンプ	●	●			●

詳しくは『体育授業を変えるコーディネーション運動65選』（明治図書）を参照



▲足打ちボン

シーソー逆立ち▶



(2) 指導の工夫

①学習過程の工夫

とび箱運動の運動構造は、助走、踏みきり、空中姿勢、着地の4つに分かれている。コーディネーション能力の観点でこれらを分析していくと、スピードのある助走（リズム能力、連結能力）、両足での踏みきり（定位能力、変換能力、連結能力）、空中に体を投げ出す（リズム能力、バランス能力、連結能力）、両足での着地（バランス能力、定位能力）が必要となる。

そこで、授業の開始から15分程度をコーディネーション運動の時間として毎時間確保し、表1のようなコーディネーション運動を進めていくことにする。

②意欲づけの工夫

開脚とび、かかえ込みとび、台上前転、横とび

の中から、自分の能力に合ったものを選択するようにする。また、課題ごとにスモールステップのカードを作り、できるところから取り組んでいくことにより、とび箱に対する恐怖心を取り除き、安心して学習していけるようにする。

③場や用具の工夫

とび箱に当たると痛い、落ちそうで怖いなどの児童の不安を少なくするために、かかえ込みとびでは、とび箱へのとび上がり・おりや、うさぎとびでおける練習をするようにする。また、台上前転では、マットを重ねた上で前回りをしたり、ステージの上のマットから前転してセーフティーマットの上においたりするようにする。

(3) 指導計画（表2参照）

【表2】指導計画（8時間扱い：本時は5時間目）

	1	2	3	4	5	6	7	8
10	《はじめ》 ○学習の進め方を知り、見通しをもつ。 ・学習カードの書き方 ・用具の準備と片づけ方	《なか》 ○準備運動をする。 ○コーディネーション運動をする。 ・馬とび、うさぎとび、足打ちボン、シーソー逆立ち、トントんジャンプなど。						《まとめ》 ○発表会を行う。
20	○オリエンテーション ・自分の力を確かめる。	できるとび方で、いろいろな向きや高さのとび箱に挑戦しよう。 ・開脚とび ・かかえ込みとび、など			できそうなとび方や上手になりたいとび方に、とびやすいとび箱で挑戦しよう。 ・開脚とび ・かかえ込みとび ・台上前転 ・横とび、など			
30								
40	○評価をする。 ・学習カードに記入する。	○評価をする。 ・学習カードに記入する。 ・めあてを確認する。			○評価をする。 ・学習カードに記入する。 ・めあてを確認する。			○評価をする。 ・学習カードに記入する。
(分)								

(4) 本時の指導 (5 / 8)

①目 標

<関心・意欲・態度>

○本時のめあてに沿って進んで運動しようとする。

○友達と協力して準備や後片づけをしようとする。

<思考・判断>

○前時の学習の反省を生かして、自分に合った場

で、工夫して練習することができる。

<技能・表現>

○自分のめあてとしたとび方が調子よくできる。

<健康・安全>

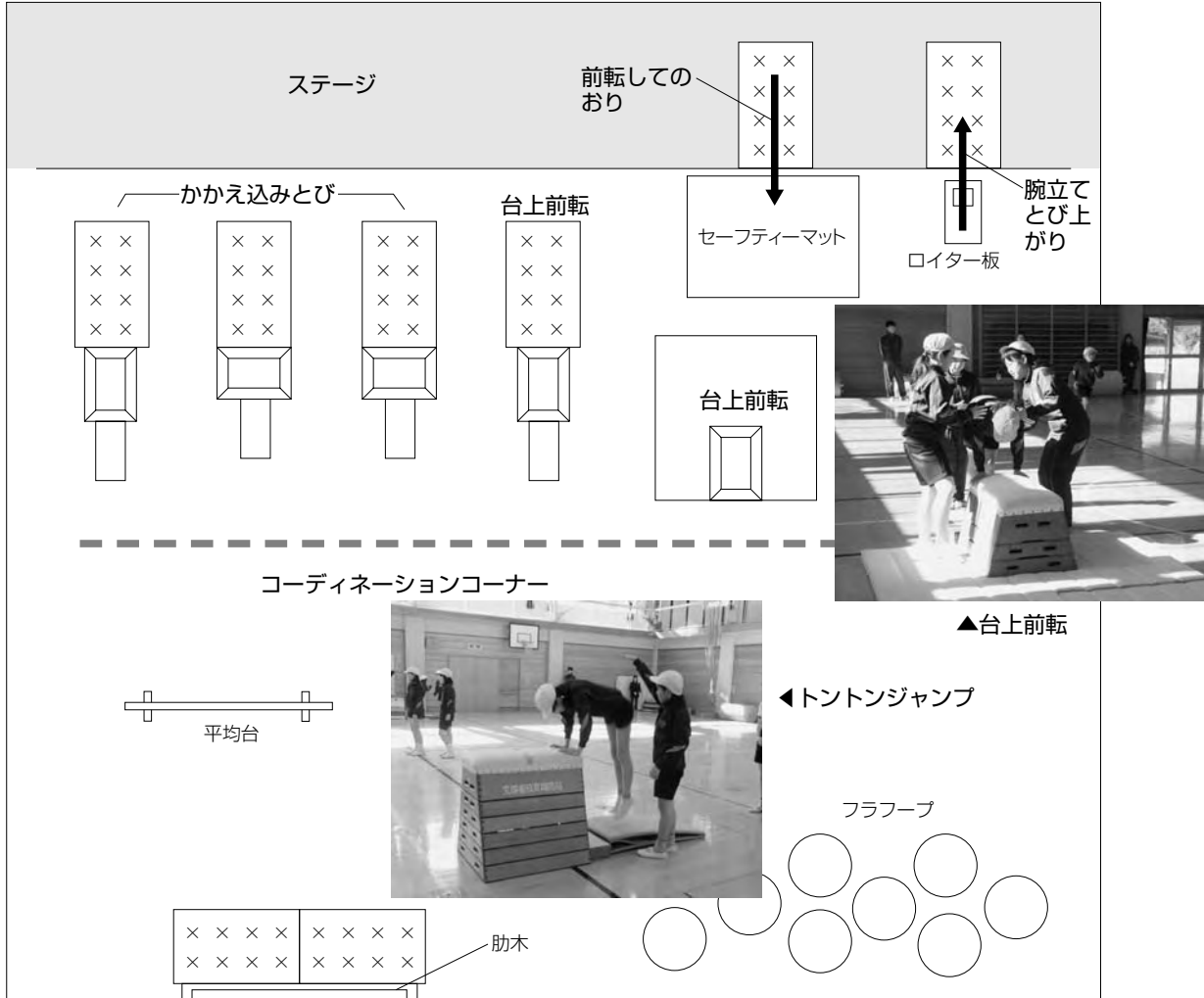
○自分や友達の安全に配慮し、補助を行うなど危険のないように運動することができる。

②展 開 (表3参照)

【表3】展開 (5 / 8)

学習のねらいと活動	教師の支援 (☆) 評価 (★)
<p>1. 準備運動とコーディネーション運動を行う。 (12分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬とび ・うさぎとび ・足打ちポン ・トントンジャンプ 	<p>☆とび箱運動に合ったコーディネーション運動にする。手足については、グループごとにほぐすように助言する。</p> <p>☆馬とびでは、とぶ人の能力に合わせて馬の高さを変えるようにする。</p> <p>☆うさぎとびでは、足をそろえ、手より足が前に出るようにする。</p> <p>☆足打ちポンでは、なるべく倒立に近い形に挑戦する。また、お互いに回数を数え合うようにする。</p> <p>☆トントンジャンプでは、腰を上げる位置に補助の児童が手を置き、高さの目安とする。</p> <p>★運動のねらいをつかんで、協力して行っているか。(関心・意欲・態度)</p>
<p>2. 学習の課題をつかむ。 (5分)</p>	<p>☆前時の活動を想起させ、めあてを考えるように助言する。</p>
<p>3. 自分の課題にあった場で練習する。 (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かかえ込みとび ・台上前転 	<p>☆前時の学習カードをもとに、かかえ込みとびか台上前転に取り組むように助言する。</p> <p>☆3～4人のグループをつくり、グループ内で補助したり教え合ったりするように助言する。</p> <p>☆とび箱の横や着地点で友達の動きを見るようにする。</p> <p>☆かかえ込みとびのポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着手するときは、体を前に乗り出すようにして手をつくようにする。 ・台上の姿勢は、膝を胸に引きつけるようにする。 ・手の突き放しは、とび箱を後ろに押し出すようにする。 <p>☆足が中抜きになってしまう児童には、とび箱の上からうさぎとびをするように助言する。</p> <p>☆台上前転のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・着手するときは、とび箱の前につくようにする。 ・台上で前転するときは、あごを引き、背中を丸めて回るようにする。 <p>☆着地がスムーズにできない児童には、ステージの上のマットから前転し、セーフティーマットの上における感覚を体感するように助言する。</p> <p>☆安全確認のために、グループの中で声をかけ合わせる。</p> <p>★自分の能力に合った場で、とび箱をとんでいるか。(思考・判断)</p> <p>★めあてとしたとび方ができたか。(技能)</p> <p>★約束を守って安全に配慮して活動しているか。(健康・安全)</p>
<p>4. 学習を振り返る。 (5分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習カードに本時の記録や反省を記録する。 ・全体で学習を振り返り、次時の予告を聞く。 	<p>☆本時の課題に対し、伸びがあった児童や積極的に補助していた児童を称賛する。</p> <p>★本時の活動を振り返り、カードに記入しているか。(関心・意欲・態度)</p>
<p>5. 整理運動を行う。 (3分)</p>	<p>☆使った筋肉をほぐす運動をする。</p>

③場の設定



2. 成果と課題

(1) 成果

運動前と運動後にとび箱運動の意識調査をしたところ、好きになった児童が多かった。これは、コーディネーション運動にゲームや競争の要素を取り入れることにより、運動が苦手な児童も意欲的に取り組むことができたためである。また、単元の運動内容に即したコーディネーション運動を工夫したので、主運動に必要な動きを養うことができ、その結果とび箱がとべるようになった児童が多かったためである。

なお、児童の感想には次のようなものがあった。「初めはとび箱が嫌いだったけれど、練習してとべるようになってうれしくなりました」「新しい技にチャレンジしてできると、気持ちが

いい」

「いろいろな技があっておもしろかった」

(2) 課題

効率よく進めていくためには、主運動の内容に即したコーディネーション運動を取り入れていかなくてはならない。例えば、シーソー逆立ちでは、利き足ばかりで踏みきるのではなく、もう片方の足でも踏みきるように両側性を取り入れるなど、従来の補助運動をコーディネーション運動の理論で工夫していく必要がある。

調整力が高まったかどうかをよりの確に判断するためには、いろいろな運動領域から能力を診断していく必要がある。(はらだ・のりかず)

コーディネーション運動を組み入れた体育学習

順天堂大学スポーツ健康科学部助教授 東根 明人

原田先生は、2003年12月からコーディネーション運動という新たな視点で授業を展開し、運動の得意な児童もそうでない児童も楽しく自ら取り組む環境をつくる工夫をしている先生である。先生は、学内全体でコーディネーション運動の研究と実践を図り、授業はもとより児童の運動能力の向上や運動の日常化など多くの成果をあげている。先生の授業実践を、コーチング科学やトレーニング科学の観点から解釈してみたいと思う。

授業の特徴

今回の原田先生の授業は、大きく2つのテーマで構成されている。第1は、運動が苦手な児童への手立てであり、本来子どもたちがもっている運動への欲求の充足という点である。第2は、とび箱運動をコーディネーション能力の視点からとらえ、コーディネーション運動によって課題解決をめざした点である。

運動が苦手な子どもは、運動やスポーツの経験が少ない、達成感を得ることができない体育の授業の影響が大きい、運動やスポーツへのイメージが狭い、運動は苦手と思い込んでいるという報告がある(杉原ら、1995)。過去になんらかの運動やスポーツを行ったときに、マイナスの経験をしていると考えられ、このマイナス経験がよろいとなって、運動やスポーツを行う重荷になっているのではないだろうか。見えない心のよろいを、原田先生はコーディネーション運動に遊びやゲームの要素を組み入れて、少しずつ軽くしようとしている。

子どもは本来無邪気に、自由奔放に動き回ることが大好きな存在であり、新しいものに会おうと喜びを感じたり、満足感を得たりする特徴もある(ラッハ、2005)。さらに、子どもたちの発想や興味・関心に基づいた、自発的な楽しい運動遊びを展開することによって、心の解放を図り、運動への意欲を高めるとともに、教師のはたらきかけによって自己の課題をもった主体的な体育学習を生

み出していくという指摘もある(池田、戸田、1999)。原田先生は、子どもの特長を引き出すために、授業の導入に毎時間15分程度のコーディネーション運動を組み込み、子どもたちが運動への意欲を高める工夫を試みている。

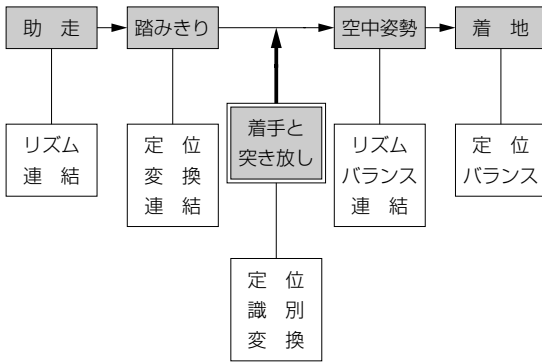
とび箱運動をコーディネーション能力からとらえ、主運動につなげた点について解釈してみよう。とび箱運動は、原田先生が書いているように、助走→踏みきり→空中姿勢→着地という一連の動作で行われる。この動きのなかで最も重要なのが、着手から突き放しのところである。つまり、とび箱運動では「腕を支点とした体重移動」がポイントとなる(根本、2000)。図1は、コーディネーション能力から見たとび箱運動を示している。原田先生は、とび箱運動をコーディネーション能力の視点から分析し、必要と思われる能力を抽出し、対応するコーディネーション能力が含まれている運動を組み立てている。

原田先生の授業実践の価値は、授業全体にコーディネーション運動の考え方を組み込んだ点にある。コーディネーション運動を準備運動のように、授業の導入でのみ行うのではなく、運動や動きにはコーディネーション能力が必須であり、それぞれの運動にはそれぞれのコーディネーション能力があるという本質を理解している。そのために、均質なグループ編成をし、段階に応じたコーディネーション運動の場を設定している。教師が、コーディネーション能力という新たな視点をもつことにより、授業における「計画→観察→評価→改善」が効果的に行われることを示唆する意味のある授業実践である。

なぜコーディネーション運動か

コーディネーション能力は、1960年代にヨーロッパで研究開発が進み、スポーツや教育現場でその検証が行われ、図2のように分類されている。そして、コーディネーション能力が最も発達する

【図1】コーディネーション能力からみたとび箱運動



小学校の時期に、適切な運動刺激（コーディネーション運動）を与えることは、技能を向上させるための前提条件（レディネス）の形成につながるといわれている（ハルトマン，1999）。ヨーロッパではすでに一般化され、授業に組み込まれているコーディネーション運動。例えば、ロシアでは1年生から11年生までの教科書に、学年ごとの目標や内容が提示され、実施されている（ラッハ，2001）。

日本におけるコーディネーション研究は、近年さまざまな分野で始まっている。例えば、神経生理学と運動の視点から、コーディネーション運動は主運動の技能向上を支えるとともに、神経系のトレーナビリティ（向上効果）を高めるという報告もある（荒木，2006）。つまり、他の運動を新たに行った場合でも、速やかに学習しやすいという脳の学習能力そのものを高めている可能性があると思われる。脳科学の視点からは、運動を習う場合、運動野も感覚野もフルに使って意識下で制御しており、学習記憶といった脳機能が必要不可欠である。そこで、すぐには上手にできない状況をあえて経験することにより、シナプス結合の維持、ひいては運動学習などに重要な影響をもたらさうるのではないかという指摘もある（柳原，2006）。さらに、コーディネーション運動を行うことで、身体面ばかりではなく、精神面への効果も期待できるという報告があり、情動面の改善・安定につながり、動機づけを高める手立てとして活用できると考えられる（桐野，東根，2005）。

以上のことから、コーディネーション運動を体育学習に取り入れるメリットとして、①神経系の能力や機能を開発・改善するコーディネーション運動は、子どもの発育発達を考慮し、その時期に

【図2】コーディネーション能力の種類と内容

（とび箱運動）

種類	内容
定位	用具等と自分の位置関係や距離を正確に把握する能力
反応	合図に対してすばやく反応し、適切に対応する能力
変換	すばやく動きを切り換える能力
連結	からだ全体をスムーズに動かす能力
識別	力の微調整や用具を上手に扱う能力
リズム	動きをイメージしたり、タイミングを合わせたりする能力
バランス	体勢を維持したり、崩れてもうまく補ったりする能力

適した運動を行うために小学校の体育学習として適切である。②コーディネーション運動の本質を理解し、授業で実践すると運動学習を効果的に実施できる。③コーディネーション運動は、教師のはたらきかけによって子どもの動機づけを高め、運動の苦手な子どもも参加しやすい。

これまでと何が違うのか

原田先生の授業実践では、大きく3点の特徴がある。①授業全体を科学的に検証されているコーディネーション能力の視点から組み立てている。例えば、主運動の内容に即したコーディネーション運動を工夫するとともに、授業計画全体をコーディネーション運動に主眼をおいている点である。原田先生自身の実践とスポーツ科学等の研究成果を結びつけ、合理的な計画を試みている。②児童の動きを、コーディネーション能力の視点から観察している。これにより、児童への言葉かけ等が明確で具体的な支援につながると考えられる。教師が自信をもって教えることは、子どもの技能習得や向上に欠かせない要因である。③運動を苦手としている子どもの心理面にはたらきかけている。例えば、不安や恐怖心を取り除くための配慮や工夫が随所に見られる。運動が苦手だという意識は、小学校3、4年生くらいまでなら十分変えることができる。ちょっとした体験や言葉かけがきっかけになったりする。

子どもたちが遊ばなくなった、遊ばなくなったといわれている昨今。ますます体育学習の果たす役割が問われるのではないだろうか。コーディネーション運動という新しい視座を提案した今回の授業実践は、他の領域においても取り組む可能性を示唆している。（あずまね・あきと）

1人ひとりが活躍できるなわとび運動

—ビュンビュンなわとび選手権—

富山県射水市立大門小学校教諭 阿尾 昌樹

はじめに

なわとびは、なわ1本あれば、狭い空間で手軽に運動ができる。また、いろいろな種類のとび方があり、個人が選択してとぶことができる運動である。そして、技が上達するにしたがっておもしろさも増してくるといった特性がある。さらに、健康の保持増進に効果的な運動であることも報告されている。そこで、気軽に短時間で有効な体力の向上が期待できることから、体づくり運動の中の「なわとび運動」を単元として構築し、実践したことを報告する。

1. 教材化にあたって

なわとび運動を教材化するにあたり、なわとび運動を体系化してみることにした(図1)。大きくは、個人で行う短なわとびと、集団で行う長なわとびに分けられる。さらにどれだけ長くとび続けることができるか、時間内に何回とぶことができるかといった体力系と、できる技の種類を増やしたり組み合わせたりする技術系に分けることができる。

これまでのなわとび運動の授業は、短なわとびによる体力なわとびや、技ができるように練習するなど、個人技を中核に展開される場合が多かった。個人が中心の場合、技術の向上が見られない

となかなか楽しめないこともあった。そこで、本実践では、短なわとびの技を難易度別に点数化し(図2)、少しでも高得点の技を組み合わせると合計点数を競うことを活動のねらいとした。そして、グループをつくり、グループどうして個人が獲得した総得点を競い合う対抗戦を行って、楽しむことにした。個人技中心の克服型の学習形態から団体戦による達成型への転換を図る教材とした。

2. 実践例(5年3組 男子14名 女子18名)

(1)単元名「なわとびで体力アップ

—ビュンビュンなわとび選手権—

(2)研究主題

自ら運動の楽しさを求める子供の育成を目指して
～子供の追究の様子をとらえた指導の在り方～

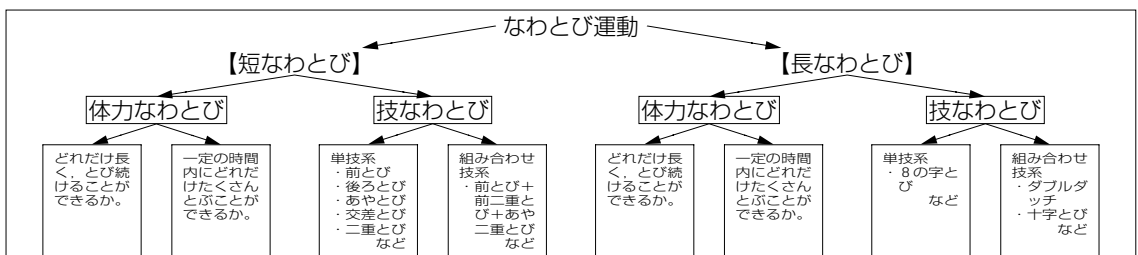
(3)研究主題との関連

①運動の特性にふれる楽しさを広げ、深めるためのねらいの設定のあり方(仮説1)

●ビュンビュンなわとび選手権の導入

グループ対抗戦をビュンビュンなわとび選手権と名づけ、ルール(図3)を子どもたちに提示した。子どもたちは、まず点数の高い技ができるよう練習に取り組むであろう。そして、組み合わせ技を考え、より高い価値点をめざすであろう。しかし、グループどうしの対戦のため、失敗すると

【図1】なわとび体系図



【図2】なわとび技の点数表（価値点）

とびかた	点数	記号	とびかた	点数	記号
1 順とび(前とび)	前	1 前J	25 側回旋と交差とび(サイドクロス)	前	3 前S・K
2 順とび(後とび)	後	2 後J	26 側回旋と交差とび(サイドクロス)	後	5 後S・K
3 前後開閉とび	前	1 前Jゼ	27 側回旋交差とび(スーパーサイドクロス)	前	15 前SK
4 前後開閉とび	後	2 後Jゼ	28 側回旋交差とび(スーパーサイドクロス)	後	17 後SK
5 左右開閉とび	前	1 前Jさ	29 混合交差二回旋とび	前	15 前KKG
6 左右開閉とび	後	2 後Jさ	30 混合交差二回旋とび	後	17 後KKG
7 かた足とび	前	1 前Jかた	31 順と背面とび	前	12 前J・K
8 かた足とび	後	2 後Jかた	32 順と背面とび	後	16 後J・K
9 かけ足とび	前	1 前Jかけ	33 背面交差とび	前	15 前K
10 かけ足とび	後	2 後Jかけ	34 背面交差とび	後	17 後K
11 かた足交互前ふりとび	前	2 前Jふ	35 かた足二回旋とび(二重とび)	前	15 前JJかた
12 かた足交互前ふりとび	後	3 後Jふ	36 かた足二回旋とび(二重とび)	後	17 後JJかた
13 側回旋と順とび	前	2 前S・J	37 交差二回旋とび	前	18 前KK
14 側回旋と順とび	後	3 後S・J	38 交差二回旋とび	後	20 後KK
15 順と交差とび(あやとび)	前	3 前J・K	39 あや二回旋(二重)とび	前	16 前JK
16 順と交差とび(あやとび)	後	5 後J・K	40 あや二回旋(二重)とび	後	18 後JK
17 交差とび	前	3 前K	41 こしぬけ三回旋とび	前	25 前JJJこ
18 交差とび	後	5 後K	42 こしぬけ三回旋とび	後	30 後JJJこ
19 混合交差とび	前	3 前KG	43 三回旋とび	前	40 前JJJ
20 混合交差とび	後	5 後KG	44 三回旋とび	後	45 後JJJ
21 こしぬけ二回旋とび	前	7 前JJこ	45 交差三回旋とび	前	60 前KKK
22 こしぬけ二回旋とび	後	10 後JJこ	46 交差三回旋とび	後	70 後KKK
23 二回旋とび(二重とび)	前	10 前JJ	47 あや三回旋とび	前	前JK, JKK, JKJ
24 二回旋とび(二重とび)	後	15 後JJ	48 あや三回旋とび	後	後JK, JKK, JKJ

【図3】ビュンビュンなわとび選手権ルール

〈演技の構成〉
 *演技は3種類の技を連続して行う。
 *1種類の技につき4回とび、合計12回とんで1演技とする。
 *選手はあらかじめ、ABCの3種類の演技を構成し、申告用紙に記入する。

〈競技〉 — チーム選手権 —
 *1人の選手に3回のチャンスが与えられ、その3回は申告したABCの、どの演技を行ってもよい。
 *3回のうち、最も高い得点のみが個人の得点になる。
 *全員が1回目の演技を終了した後に2回目の演技を行い、同様の2回目の演技をした後に3回目の演技を行う。

〈演技の採点〉
 *演技は12回止まらず演技したら得点になる。つまり、演技が止まった(なわがひっかかった)場合は0点となる。
 *申告用紙に記入した演技以外の技を行った場合は0点となる。
 *相手チーム全員が採点する。

グループに得点が入らない。そこで、勝つためには確実に点を取ることができる技の組み合わせを考えることも大切になってくる。したがって、難易度的に低い技でも点数を着実に取れることで、どの子どもたちも、無理になわとびの楽しさを味わうことができると考える。

また、二重とび系の難易度の高い技ができるようになるために、ジャンピングボードを用意する。トランポリンのように高くジャンプできるため、回転数の多い技の補助に有効であろう。また、はずみ具合が心地よく夢中になって練習に取り組めるものと考え

▶ジャンピングボード



②仲間とのかかわりを深めるための場の設定 (仮説2)

●話し合いを生み出す学習過程の工夫
 個人技であるなわとびを、グループ対戦型にすることで、グループとして勝つために得意な子どもが技のコツなどを教えたり、対戦に向けて技の

組み合わせ方や組み合わせ演技のアドバイスをしたりするようになるであろう。また、なわとびは女子に得意な子が多く、ボール運動などではあまり主張しない女子も、男子に対して意見を言うことが期待できる。そして、競技中は応援の声をかけ合ったり、励まし合ったりすると考える。このように、互いに教え合い、認め合うなど技能面、心情面での高まりが期待できるであろう。

③内面を見つめる自己評価のあり方と教師の支援 (仮説3)

●体育ノートの活用
 授業終了後に、その日の学習を振り返り、体育ノートに自分の思いを自由に書かせる。
 このノートは、自分の心の中を正直に書くよう促し、子どもたちの本音を表せるようにしたい。そうすることで、教師は子どもたち自身が本当に困っていることや悩んでいることをとらえることができる。そして、子ども1人ひとりを理解していく材料として次時の指導に生かしていくこともできる。また、1人ひとりの思いを共感的に受け止めてコメントを書いたり、困っていることには助言したりすることで、子どもの活動意欲を高め、ていくことができると考える。

1	2	3	4	⑤	6(時)
オリエンテーション	○準備運動 ・みんなでジャンプ(なわとびリレー、ミュージックなわとび) *みんなで楽しくなわとび運動をする。				
・なわとびについて ・なわとび選手権について ・ビデオによる技の解説	○選択制なわとび ・わくわくなわとび(短なわとび、長なわとびなど)			○なわとび選手権 ・4人8チームリーグ戦 *組み合わせ技を練習し、チームで力を合わせて競い合っ楽しむ。	

(4)全体計画(上図参照)

(5)授業の実際と考察

●勝利を呼んだY児の活躍

イエロービクトリーチームは、リーグ戦が始まって3連敗とまったくいいところがない。Y児は、あまり運動が得意でなく、前二重とびも3~4回できる程度で、14点が最高プラン(図4)。それも10回に1回ほどしか成功していない。しかし、選手権では確実にAプランで5点獲得していた。リーダーのN児はクラスの中でいちばん運動神経がよく、ジャンピングボードの上で前三重とびができるが、本番では失敗することが多く得点が伸び悩む。それがこのチームの敗因である。

申告用紙			ナンバー		
チーム名	イエロービクトリー		名前	Y. A	
A演技			B演技		
技の順番	技名	価値点	技の順番	技名	価値点
1	前とび	1	1	前とび	1
2	前後開閉	1	2	前あやとび	3
3	前あやとび	3	3	前交差とび	3
合計点		5	合計点		7
C演技					
技の順番	技名	価値点			
1	前とび	1			
2	前あやとび	3			
3	前二重	10			
合計点		14			

【図4】申告用紙(Y児の例)

本時、ブルーガッツチームとの対戦では、教師のアドバイスを受け作戦を変えた。そして、確実に成功するBプランを成功させた。試合は拮抗し、最終演技者のY児を残し、得点は88点对75点で13点差であった。

チーム名 ブルーガッツ					チーム名 イエロービクトリー						
順	名前	得点			最高得点	順	名前	得点			最高得点
		1回目	2回目	3回目				1回目	2回目	3回目	
1	C.F	14	14	×	14	1	N.N	27	41	×	41
2	W.E	6	×	×	6	2	O.R	7	14	27	27
3	M.Y	14	27	×	27	3	H.K	×	×	7	7
4	K.H	×	×	41	41	4	Y.A	5	×		
合計点					88	合計点					75

【図5】なわとびスコアカード

N児は「Y君、失敗してもいいからCプランで逆転をねらおう」と声をかけ、Y児は「うん」と大きくうなずいて、ジャンピングボードの上に立

った。他の児童も大きな声で声援を送る。ゆっくりスタート。成功。大きな歓声があがり、Y児を中心に喜びの輪が広がった。1点差の大逆転勝利であった。チームの勝利に貢献したY児に笑顔がはじけていた。

おわりに

運動が苦手な子も活躍してチームに貢献した達成感を味わえることができる体育をめざし、ビュンビュンなわとび選手権を行った。子どもたちは自分ができる技を組み合わせることで点数を取ることに喜びを感じ、休み時間も一生懸命ジャンピングボードの上でなわとびの練習をした。そして、教え



合い、かかわり合っていた。本時の授業を終えたとき、Y児は目を輝かせ、額に汗を光らせながら「先生、まだやりたい」と言った。本実践が子どもたちにとって価値あるものであったと感じ、これからも研究に努めていきたいと思った。(あお・まさき)

<参考文献>

- 1) 榎本繁男・岡野進・和中信男『誰でもできる楽しいなわとび』大修館書店(2005)
- 2) 古屋三郎『図解なわ跳び』不昧堂書店(1964)
- 3) 橋爪和夫・阿尾昌樹「児童の短なわ跳び運動の実態調査」富山大学教育学部紀59:p81-87(2005)
- 4) 北川隆「平成2年度文部省体育実技指導者講習会 基本の運動班講習資料」(1990)
- 5) 松本格之祐『教育研究 昭和57年1月号』(1982)
- 6) 太田昌秀『INFなわとびハンドブック』アシックス(1992)

※本実践は北川隆先生(当時大阪教育大学助教授)の資料をもとに、実践したものです。この場をお借りして、御礼申し上げます。

富山県小学校教育研究会 射水ブロック体育部会

射水市立東明小学校教諭 蒲田 浩二



授業研究の様子

1. 発足と歴史

本会は、富山県小学校教育研究会の射水市ブロックの組織です。富山県小学校教育研究会は、各郡市区域における小学校教育研究活動の連絡・促進を図ることを目的として、昭和24年に発足しました。敗戦、それに続く混乱と虚脱の数年間、まだまだ占領軍の顔色をうかがわないと自由な教育活動ができない時代に、全県的な協力で各単元に応じた実践具体例をつくろうという声が盛り上がったことが背景にあったと、『小教研の歩み』には記されています。

こうした長い歴史の中で、体育部会では全国体育学習研究会（全体研）の全国大会を中学校や高等学校とも協賛して過去3回開催しています。

- ①昭和38年 第8回大会
- ②昭和47年 第17回大会
- ③昭和62年 第32回大会

このような諸先輩方の熱意は途切れることなく受け継がれ、今日に至っています。研究主題に見られる近年10年の動きを紹介します。

①平成8・9年度

「自分の願いの実現を目指して、運動する楽しさを味わうとともに、健康で安全な生活を送ろうとする子供を育てる支援はどうあればよいか」

②平成10・11年度

「自分の願いの実現を目指して、仲間と楽しく運動する子供を育てる支援はどうあればよいか」

③平成12・13年度

「自分の願いの実現を目指して、仲間と楽しく運動する子供を育てる支援・指導はどうあればよいか」

④平成14・15年度

「仲間とかかわり、自ら運動の楽しさを求め、健康な生活を送ろうとする子供の育成を目指して～育てたい子供の姿を明確にしたねらいの設定と指導過程～」

⑤平成16・17年度

「自ら運動の楽しさを求める子供の育成を目指して～子供の追究の様子をとらえた指導の在り方～」

このように、「運動の楽しさ」をキーワードとして研究実践を積み重ねてきました。

2. 今年度の取り組み

今年度は、動きの高まりを実感できる1時間1時間のねらいの設定と指導のあり方を中心に研究を進めることとし、研究主題を「動きの高まりを実感しながら、自ら運動の楽しさを求める子供の育成を目指して～心と体に働きかける体育学習の在り方～」として取り組んでいます。動きの高まりを実感するとは、一律に設定された課題の達成や動きの習熟のみを指すのではなく、子ども1人ひとりが感じ取る感覚の高まりや技能の向上を指しています。つまり、個に応じた指導をより追求していこうとしているわけです。

そこで、子どもたち1人ひとりが授業後に書く対話形式の「体育ノート」を大切に実践しています。自由記述と観点を絞った記述はどちらがよいか、運動の時間と書く時間の確保はどうするかなど、議論を重ねながら試行錯誤しています。

3. 今後の課題

射水市は新規教員採用が少なく、会員の平均年齢が高くなる一方です。これまで市内の教職員を対象に1泊2日で行ってきたスキー実技研修会も指導者の確保が厳しくなり、昨年度は日帰りで実施しました。よき伝統を守りつつ、時代に即応した研究体制をつくり上げることが急務です。また、これまで培ってきた実践具体例を後進に伝えていくよりよい方法も検討していかなければならないと考えています。 (がまだ・こうじ)



授業を通して運動の楽しさにふれる

— 2年 ボールけり遊びから —

新潟県新発田市立五十公野小学校教諭 丸山 久志

はじめに

子どもたちの体力の低下、運動する者としいない者の二極化傾向が叫ばれて久しくなります。小学校の現場では、身体活動をとまなう運動遊びの不足により、体育に限らず基本的な動きのできない子どもが多くなっていることに危機を感じています。このような現状を考えると、体育授業の学習経験を通して、基礎的運動能力を高めるとともに、運動することの楽しさにふれさせ、運動の日常化を図っていく努力が必要だと考えます。

2年生における副読本の活用例

2年生のボールけりゲームは、ボールをけったり、止めたりして、簡単なルール of ボールゲームを楽しむものです。以下のようなことを大切にしながら取り組みました。

①基礎的運動能力を高めるために

- 止まったり、走ったりしている状態からボールをけることができるようにする。
- 足を使ってボールを止めることができるようにする。
- 目標物をねらってボールをけることができるようにする。

②運動することの楽しさにふれさせるために

- シュートの喜びを味わわせる。
- ペアやチームの仲間と協力する喜びを味わわせる。(味方とのかかわり)
- 勝敗を素直に認めることができるようにする。(対戦相手とのかかわり)

ここでは仲間と協力する喜びを味わわせるために、学習活動は、ペアまたはグループで行うことを原則としました。

最初はペアでボールを体育館の壁に向かってけ

る活動を行いました。静止した状態からボールをけり、慣れてきたところで助走してボールをけるようにしました。子どもたちは助走したぶん、けったボールに勢いがつくのがわかり、とても楽しそうでした。壁に当たって戻ってきたボールを足で上手に止めていたペアを紹介したところ、他のペアもあつという間にボールを足で止められるようになっていました。

次にペアでボールをパスし合う活動を行いました。ボールをパスし合い、徐々にペアの距離を離していきました。子どもたちは距離が遠くなるにしたがってパスがそれてしまうことが増え、ボールを取りにいくのが大変な様子でした。しかし、だんだんとペアの子をよくねらってボールをけるようになり、パスがそれなくなっていきました。

子どもたちがボール操作に慣れてきたところで、2対2のシュートゲームを次のような簡単なルールで行いました。

- シュートしたボールがコーンとコーンの間を通過すればゴール。
- コーンとコーンの間を2人で守る。
- 1分で攻守を交代する。

どの子にもシュートのチャンスがあり、子どもたちは最初、楽しそうにゲームをしていました。しかし、しばらくするとあちこちでトラブルが発生し、ゲームが中断する姿が見られました。シュートがゴールしたかどうか、また何対何なのかがはっきりとせずにもめていました。そのせいで、ゲーム終了時に勝敗を素直に認められずに対戦相手を非難する様子も見られました。

ここで、副読本の登場です。2年生『たいいくのがくしゅう』には、「10こボールサッカー」というものが載っています。この「10こボールサッ

カー」には次のような特徴があります。

- ゴールの中にボールが入ってれば得点になるので、シュートが決まったかどうかははっきりとわかる。
- ゴールの中にシュートしたボールが残っているので、そのボールの数を数えれば、何対何かがひと目でわかり、勝敗を素直に認められる。
- 4対4の合計8人で10個のボールを使うので、どの子もシュートできるチャンスが大きい。

この教材を活用することにより、子どもたちの様子に変化が見られました。ゴールをめぐるトラブルが見られなくなったのです。どの子もボールに触れることができ、満足そうな表情を見せ、ゴールを決めると、とてもうれしそうにしていました。また、残りのボールが少なくなると友達と声をかけ合ってゴールをねらうなど、協力してゲームを楽しむ姿が見られました。ゲーム終了時には素直に勝敗を認め、負けたチームが勝ったチームに拍手を送っていました。気持ちよく「ありがとうございました」と元気な声であいさつをする様子も見られるようになりました。

どのような手順で活用したか

写真は2年生『たいいくのがくしゅう』(P.36-37)「サッカーあそび」の最初のページです。見開きで学習の進め方がわかりやすく表現してあります。また、イラストや吹き出しを使って楽しそうに10個ボールサッカー(サッカー遊び)をしている様子を表しています。

活用のしかたですが、まずはイラストをじっくりとながめさせます。これで、おおまかな場づくりがわかります。

次に子どもたちと吹き出しを読んだり、気づいたことを見つけさせたりして、「10個ボールサッカーは楽しそうだな」という気持ちにさせます。

さらに「ルールのれい」を読み、意見を出し合うことでゲームを楽しむための簡単なルールを工夫します。

ゲーム前には「やくそく」を読みます。そして、「やくそく」を守れているかどうかをゲーム中に



教師がフィードバックをしていきます。また、授業の最後には「やくそく」が守られたかどうかを、挙手による自己評価をさせることで、望ましい態度が身につけていきます。

また、P.39の「まとめ」では、ゲームに入ってからすぐに鉛筆で○を薄く塗っておき、単元の最後に赤鉛筆で色を塗るようにすると、この単元を通しての自分の伸びを子どもたちが感じることができそうです。

おわりに

2年生のボールけりゲームを通して副読本の利用のしかたを述べました。他の単元でも、同じように『たいいくのがくしゅう』を見せて意欲を喚起し、「学習の進め方」や「やくそくの例」などを活用すると、子どもは進んで学習に取り組めるようになると思います。副読本を有効活用することで、体育学習の楽しさを引き出し、「運動ができる喜びを感じさせる授業」や「運動の楽しさにふれる授業」ができていくと思います。

10個ボールサッカーでは、「得点できた」「友達がほめてくれた」「気持ちよかった」「ゲームは勝ったり負けたりが楽しい」というような楽しさを子どもたちに感じさせることができました。このことが「休み時間もやりたいなあ」「放課後も遊んでみよう」という思いを育み、運動の日常化へとつながっていくものと思います。2年生の子どもたちは休み時間になるとグラウンドへ出て、元気にサッカー遊びをしています。このように体育の授業の中で「できる喜び」を味わわせ、子どもたちに「もっと運動したいなあ」という意識をもたせることが、子どもたちの体力低下に歯止めをかけるものと思います。(まるやま・ひさし)



いじめと自殺を考える

ジャーナリスト 岡崎 満義

北からも南からも、いじめにあった小、中学生が遺書を残して自殺した、という痛ましいニュースが伝えられた。その遺書に関係者が1年も握りつぶしていたり、担任教師がいじめを主導していたり、信じられないような事態である。

いじめによる自殺は増えているのか、減っているのか、よくわからない。文科省の調査では、全体的にいじめは減っており、1999～2005年度までは、いじめによる自殺はゼロとなっている。しかし、これらの数字は検証されない自己申告だから、信憑性が薄い、との声もある。この調査が始まったのは1985年。翌年、東京都中野区の中学2年生が、いじめを訴える遺書を残して自殺した。1994年には愛知県西尾市の中学2年生が、やはりいじめを苦に自殺している。そして、今回、である。ほぼ10年おきに、全国的に地域のかたよりなく、いじめによる自殺事件が起こっている。いじめは水面下で恒常的に続いているとみるべきだろう。



痛ましい事件が報道されるたびに、私は思い出すことが2つある。

その1。十数年も前のことだが、ある広告代理店のロンドン支社長と会ったときのこと。雑談しているうちに、支社長はこんなことを話した。

「わが支社に、日本でいえば高校卒の若い女性タイピストがいるんです。ある日、彼女が『日本人は不思議だ。あなたのところにやってくる日本人を見ていると、話題はさまざまだが、とにかくあなたと同じ意見だ、同じ考え方だ、と手を取り合って喜ぶ。意見が同じだということを、ほとんど例外なく、あんなに喜ぶ人たちがいることに、私はびっくりした。私は学校で、人間の価値は、人それぞれが自分の考えをもっていること、自他の違いがあるのが当たり前だ、と教わってきた。自

分と他人の意見が違うから、話し合いの必要が生まれるのだと思う。日本人は他人と異なることより、何よりも同じことを喜ぶんですね』と言ったんですよ。虚をつかれたというか、特別にエリートでもなく、ごく普通の庶民的な娘にそう指摘されて、私はびっくりしました」。

日本人の日常生活の中にある、まわりと同じでありたい、同一同化指向、放っておけばいつの間にか一色になる性向、赤信号みんなで渡れば怖くない、すぐ群れたがる気分……などを、若いロンドン娘は直感したのだろう。

異なるものへの違和感、居心地の悪さ、不安、もっといえば恐怖感が、気持ちの根っこのところにある。同じでありたい、同じであることの安心感がほしい、と私たちは絶えず心の奥深いところで願っているように思う。グローバリゼーション、異文化交流が声高に叫ばれる時代になったが、なお同一同化指向のDNAは、温存されているように思う。

いじめは多分、徹底した異分子排除のあらわれである。勉強がよくできる、逆にできない、言動が変わっている、どこかで目立った弱みを見せる、汚い。グループの平均的な行動、リズム、気分の枠組みを、つつい壊してしまう者を、あたかも昔の村八分のように疎外するのである。カメレオンのように、まわりに同化する保護色をその場にに応じて使いこなせない者を、同化圏外へいびり出してしまうのである。

いじめは日本社会の通奏低音にちがいない。出る杭は打たれる。しかし出すぎた杭は打たれないのも事実だ。それは別格の存在として、上手にまつりあげておけばよい。日本人の強力なDNAとも見える同一同化指向があるかぎり、いじめ排除は極めて難しい問題だ。30年前、日中国交回復の

ころ、「小異を捨てて大同につく」日本人に対して、中国人は「小異を残して大同につく」と言われたものだ。ここでも、早く異なるものを捨てて、同じものになりたい、という気持ちがよく出ている。文科省がどんなに旗を振って、一億総懺悔風に教育委員会や学校の先生を指導しようとしても、簡単に片づく問題ではない。

その2。子供の自殺事件があると、私はきまっ林達夫さんの「子供はなぜ自殺するか」という短いエッセイを引っ張り出して読む。1937年『婦人公論』に発表されたエッセイだ。今から70年も前に書かれたもので、社会背景もすっかり変わっているが、何度読んでもこのエッセイにはなぐさめられるのだ。子供の自殺の解決策が示されているわけではないが、いやむしろ「子供の世界は本当を言えばまだ我々には十分にわかっていない。いわんや子供の自殺をや」という、頼りないといえれば頼りない立場からの発言なのだが、このエッセイには対処療法がないぶん、懐の深さがあって、なぜか不思議ななぐさめのようなものを感じる。

ここでは、いじめによる自殺は扱われてはいない。「子供は人を愛する前に、ただひたすら人から愛されんことを求めている。それもただ愛されるだけでは十分でなく、ほかの誰よりも以上に独占的に愛せられんことを望んでいる」子供が、弟妹の誕生でその独占愛が崩れたとき、嫉妬からの自殺へ歩み出すことを例にあげている。最近のものと、自殺の動機はまったく違って見えるが、愛が深くかかっているところは同じだといっていだろう。

林達夫さんは、「愛と共に子供の自由についても語らねばならぬ」と、論点を一歩前へ進める。「子供ほど自由を欲し、そして拘束を嫌がるものはない。しかるに社会は一つの拘束と制圧との体系である。そして広義の教育というものも元来社会に適した一定の感情的、知的、道徳の状態を、まだ社会生活に未熟な若い世代に植えつけることをその任務としているから、それは必ずある程度まで拘束的組織とならざるを得ない。このことは子供をして、彼が本来もっている生活衝動、即ち幸福を求めんとする意志と、教え込まれた既成観念と、つまり自由と抑圧との板挟みに押しやり、彼らに何らかの内心の葛藤を作り出すことを意味する。教育から形成される『良心』と自然に与え

られている『人間性』との争闘は、すべての子供がその児童期において多少とも深刻に経験する生活悲劇である。そしてこの闘いに破れたものは、つまり、その両者の一定の平衡を得ることのできなかったものは早くも生活敗残者となって、その一部は自らの命を絶つ道をとるに至るのである」。

いつの時代でも子供が学校や家庭で味わう「生活悲劇」の上に、今、さらにいじめが加えられれば、自殺はいっそう子供にとって近いものとなるだろう。それを押しとどめる適切な手段を、私はまだ知らない。事後、学校の先生や教育委員会の関係者が、子供の遺族に懺悔し、おわびしたところで、問題解決とはならないだろう。いじめの発火点は教室であっても、その根は学校、家庭、地域、広く深く日本の社会に伸びているからだ。

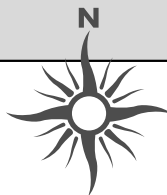


小学校、中学校の義務教育は、つまるところ「読み書きそろばん」だと思う。それは昔から変わらない、教育の心棒である。私はそれに「汗かき笑顔」をプラスする。「読み書きそろばん汗かき笑顔」と、呪文のように声を出してみる。汗かきは体を、手足をよく動かすこと、よく遊ぶこと、よく歩くこと、そして学校の体育である。

林達夫さんのいう「教育から形成される『良心』と自然に与えられている『人間性』という矛盾するような2つのものをグイと貫く棒の如きものが体育ではなからうか。虚子の句に「去年今年貫く棒の如きもの」に感じる野性味、野太いものからの連想である。「良心」と「人間性」、言い換えれば、野性と教育を調和へ導くものは、精緻な心理分析やカウンセリングなどではなく、いかによく体を動かして大量の汗をかくか、にかかっているように思うのである。

力士やスポーツのアスリートに「心技体」があるように、小、中学生にも「心技体」はある。その中の基礎である「体」をどうつくっていくかが問われなくてはならない。昔は子供の遊び場だった道路が、今は車に乗った大人に独占されていることひとつとっても、汗かく環境は悪くなっているのだ。有識者による教育再生会議の名案・処方箋を待つより、どうしたら小、中学生たちがたくさん汗をかき、いっぱい笑うことができるか。現場の先生をはじめ、みんなが心をくだいでいかななくてはならないように思う。

おかざき・みつよし／一九三六年鳥取県生まれ。京都大学文学部卒業後、柳文藝春秋入社。一九八〇年スポーツグラフィック誌「テンパー」創刊にあたり初代編集長となる。その後各誌の編集長を歴任し、一九九九年退社。退社後はその経歴を生かしジャーナリストとして活躍中。



中教審「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」
これまでの審議の状況を受けて

座談会：近年の子どもの実態とこれからの体育



●出席 神奈川県川崎市教育委員会指導主事 杉本 眞智子
埼玉県宮代町立須賀小学校教諭 山口 隆夫
司会・東京学芸大学助教授 松田 恵示

松田 学習指導要領の改訂に向けて、さまざまな議論がなされている最中ですが、その動きを背景に、現場で活躍されているお二人の先生方を迎えて、現場としてそういった問題をどのように受け止めているのかについて話し合っていきたいと思います。まず、今までどのような体育の授業づくり、実践を行ってきたかについてお聞きしたいと思います。

■印象に残る私の授業づくり

山口 授業づくりについていえば、運動量がきちんとあるということを第一に考えています。第二には、どの子どもも楽しめる内容を教師が工夫しながら子どもに提供できる、その2つを柱として授業を考えています。何よりも、その2つの柱を通して「できるようになる」「自分の伸びがわかる」授業を大切にしています。

実際に行った授業で特に印象に残っているもの



は、2つあります。1つは、今から10年以上前になりますが、6年生の表現運動の授業です。1つのテーマに向けて体育館の中で取り組んだのですが、子どもたちも私も無我夢中で目いっぱい動いた経験があります。子どもたちは夢中になって体を動かすんですね。ああだ、こうだの理屈ではなくて、自分の体を動かしたいという欲求の中でみんなで群れて目いっぱい動いた授業として印象に残っています。

もう1つが、バランスボール（Gボール）と綱引きの授業です。バランスボールについては、初めて取り組む子たちがほとんどでしたが、座って転がってみんな楽しそうな顔に変わっていく。そして、終わったあとに、「体に効いたよ」「このところに効いたよ」という声が自然とあがってきました。なによりも上手とか下手とか、うまい、できる、そんなことは関係なく、みんなで活動できたことがとても印象に残っています。そして綱引きですが、これは私の勤務校のある宮代町が毎年綱引き大会を行っていきまして、地域スポーツとの連携を図るという目的で始めたものです。私たちのチームで綱引き大会に参加しようという目標

のもと、クラスみんなで取り組んだのですが、目的意識がきちりと定まって盛り上がった授業でした。

松田 杉本先生もさまざまな授業を積み重ねていらっしゃると思うんですが、これまでの印象的な授業づくりについてお聞かせ願えますか。

杉本 いちばん心に残っている授業実践といえますと、6年生での「世界記録に挑戦」という陸上運動の短距離走の授業です。簡単に説明しますと、当時の100m走の世界記録は9秒79だったと思う



んですが、その9秒79の時間が経過する間に私たちは何m走れるのかという逆の発想で、1人ひとりの走力によってスタートする位置を変え、より長い距離を走ることに挑戦するわけです。「僕は、今日は51mのスタートラインから挑戦してみよう」とか「私は60mから挑戦しよう」といったように、各自のめざす記録が違います。

また、ただ単に挑戦するだけではなく、1人ひとりが自分の走りを分析したんです。走りを分解写真に撮り、当時のモーリス・グリーンだったか、一流選手の走りを子どもたちに見せまして、自分の走り比べてどこが違うのか、腕の振りやももの上げ方、ピッチやストライドなどについて子どもたちが自分で分析してめあてを立て、ペア学習で互いに見合っ練習し、それをもとに記録に挑戦してみるという流れです。今まで自分の走りを実際に見て「めあてをもつ」ということがなかったものですから、子どもたちは自分の走りに興味をもちましたし、フォームの改善ということで意識が高まりました。学習を進めていくうちに、記録も伸び、実際に練習したことが記録として現れるということもあって、短距離走に対するモチベーションが高まっていった授業でした。

松田 めあてのもち方、もたせ方に非常に工夫されていることと、達成していくときの方法が子どもにとってもやさしくて、ためになる、役に立つように工夫された授業だと思います。お二人の授業の様子をお聞きして、子どもたちが夢中になって取り組んでいる様子が目に浮かぶようですが、逆にこれまでの授業づくりにおいて、今の子ども

の実態から問題だと思われることなどありませんでしょうか。

■子どもたちの変化と授業づくりの工夫

山口 子どもたちの運動に対しての二極化だと思います。運動が好きな子と、運動が嫌いというだけでなく、体を動かすことも億劫な子もいます。この2パターンの子がクラスに存在するなかで、誰もが楽しむ内容を提供するのは非常に大きな課題があると思います。上位の子に目を向けた展開を考えると、逆に下位の子には難しい問題がある。その逆もあります。だれもが楽しめる内容をどう子どもたちに提供していくかが大きな問題になってきていると思います。

杉本 小学校へ入学してくる前に、いろいろな運動や遊びの経験があるかないか、経験しているかどうかで運動能力や身体能力は違ってきます。こういったことも運動の好き嫌いや、運動に対する取り組み方に関係していると感じます。また、自分たちで考えるというよりは、受動的です。受け身にまわって、次どうすればいいかわからないという子が増加傾向にあると思います。

山口 今の子どもたちの変化といえば、こういう子もいます。例えば、サッカーがすごく得意なので、この子は運動が得意なのかなと思ったらとび箱がとべないとか、野球はすごく上手だけどさか上がりはさっぱりだめ。一見得意そうだけど、経験不足からその部分が欠けているということを感じます。だからこそ、学校体育の中でどういう内容を提供していくのが大きな課題になっていると思います。

杉本 それとコミュニケーション能力の不足もあると思います。話し合い活動が体育では重要なウエイトを占めていると思いますが、なかなかうまく話し合いができないとか、自分の考えは言うが、相手の言うことを受け入れられないとか。ですから、体育の学習を通じて、技能だけでなく、考える力や表現する力も育てて、それが生きる力を育むことにつながればいいなと感じています。

山口 私もまったく同じ考えで、体育の学習の中で作戦を考えたり教え合ったりする場面がありますが、自分の考えをうまく伝えることができなくてトラブルになる。体育の場合、身体活動が中心の教科ですので、体育を核としながらさまざま

な教育の場面でそういう視点をもって子どもたちにアプローチしていくことが、体育の授業の中でのかわり合い、運動量の確保という意味でも充実していく大切なポイントと考えます。

松田 そういった子どもの変化は大勢の先生が感じていることですか。

杉本 日ごろの学級経営ですとか、児童指導も絡めて、そういうところは話題になっていると思います。それと、子どもたちに耐性がないということもいわれています。

山口 先生方と話していても、自分が授業をやっていくなかでも、杉本先生がお話されたことは感じますね。まず、耐性という面では、集中する時間が続かない、すぐに飽きてしまうという子もいます。また、友達の話の聞けない、自分だけという子、そして、すぐキレてしまう子、授業中でもそういう子がいて先生方で話題になっているようです。そういう子は教室内にいるときは何とか把握できるのですが、体育の授業では校庭という広いスペースになるのでなかなか把握できなくて困っているという先生もいます。

松田 子どもたちのベースが変わってきている、そして個人差が激しい。体育の授業なら30人いれば30人を指導していくわけですが、先生が1人ひとりの児童にどうかかわっていくことができるかが問題になってきますよね。逆に、ほかに子どもの変化から考えないといけないとか、工夫しないといけないとお感じになられることはありますか。

山口 先生方によく話すのは、体育は年間90時間と決まっています。その中に保健もありますので、その限られた時間の中で学習を効果的にするために、学び方をぜひ身につけていきたいと思います。学校という組織の中で、どの子も満足できる授業レベルを確立していくことが大事だと考えています。

杉本 それとあわせて、態度ということも大切だと思うんです。フェアプレイに対する態度、協力や責任に関する態度、また、安全面を含めて、チャレンジすることの価値に対する態度など、そういった態度を大切にしていきたいと思います。

松田 そういった学び方や態度を育てていくために、授業づくりにおいての工夫例はありますか。

杉本 単元全体を、ねらい1・ねらい2といった大きなくくりだけで作成している指導計画があり

ます。しかし、例えば単元のこの時間を使って、態度とか、安全面とか、そういったことを明確に子どもたちに伝達していくというように、今日は何を学習するのかを明記した指導計画を作成していきたいですね。

山口 私も同感ですが、私は単元の中で、指導のヤマ場、ウエイトを置く部分をつくることを心がけています。この時間は態度にウエイトを置いて指導する、次の時間は技能に関することにウエイトを置いて指導していくというように。やはり意識が違ってきて、結局はそれから先の授業の流れがスムーズにいくことになります。あれもこれもとやってしまうと、子どもたちもなんだったんだろうと、何も身につかなかったということにもなりかねないですね。

■「身体能力」をどうとらえるか

松田 子どもたちが変わるなかで、我々教師の側も授業のねらいを今一度しっかりととらえ直すということだと思いますね。現在、学習指導要領の改訂に向けての議論が進んでいますが、これまでの



体育の内容を、「身体能力」と「知識、思考・判断」、そして「態度」というふうにとらえ直してみてもどうかとか、これまでの体育では何を身につけさせるのかという面が少しあいまいな部分があったのではということから、体育の内容を発達段階に応じて構造化していくことをもっとはっきりさせてはどうかといったことがいわれています。これについてどうお感じになっているかお聞かせいただければと思います。

山口 身体能力という点でいえば、私も体全体を育てていくことが、特に小学校期では大切なかなと感じています。例えば短なわとびなら、5分間とび続けていれば調整力も身につくし、動きを持続する能力も身につくというように、1つの運動を通じて、ここ・あそこ絞るのではなくて、体全体を考えて子どもたちに運動を提供していくのが小学校の段階では大事になってくる。特に低学年では運動のとらえ方、身体に対するアプローチが大事になってくる、そういう意味で身体能力

という言葉を見て、そのとおりでなと感じました。具体的には、マット運動で3、4回まっすぐリズムよく回ることができる、こういうのが身体能力ですよね。くるくるとリズムカルに自分の体をうまくこなすことができる、そういった身体能力を身につけることは大事だと思いますね

杉本 現在、「身体能力の要素」として、短時間に集中的に力を発揮する身体能力、持続的に力を発揮する身体能力、柔軟性を発揮する能力、巧みに身体を動かす身体能力が示されています。これらは、現行の「基本の運動」や「体力を高める運動」を効果的に指導することによって身につけていくのではないのでしょうか。

また、「生涯にわたって運動に親しむための身体能力」については、技能的要素を多く含み、学習指導要領にある運動を、4つの枠組みで総括的に表現されています。子どもたちが技能的な面を含め、各領域の運動の特性にふれた楽しさを十分に味わうことが、身体能力を身につけていくことにつながると思います。

山口 生涯ということに関していえば、例えば、サッカーがもっている特性にふれて、サッカーは楽しいんだということを授業の中で味わわせていくことが、将来にわたって運動に取り組んでいく大事な基礎になってくると思うんです。そういうことを考えると、小学校期に陸上、水泳、器械、表現・リズム、ボール運動などの多くの内容を、教師が工夫しながらだれがやってもよかった、おもしろいという授業を提供していくことが大事になってくると思います。

松田 ただ、身体能力という言葉が前面に出てしまうと、身体能力を高めるためにサッカーを教える、つまり昔のトレーニングふうの体育に戻る危険性は現場にはないですか。

山口 身体能力という言葉が前面に出すぎてしまうと、トレーニング的なことをやればいいんだというふうに考える先生が出てくるかもしれません。ここでの身体能力とは「運動することを楽しむことのできる能力」であることを説明すべきだと思いますし、これからの時代に対応するために教師自身も意識改革をしていく必要があると思います。

杉本 身体能力イコール何々の技能というふうに考えるのではなく、その運動の楽しさを味わい、これを続けたい、もっとやりたいという気持ちを

育むことが、生涯にわたって運動やスポーツに親しむための身体能力を培うことになると思います。運動の機能的特性にふれて、その楽しさを十分に味わっていくわけですが、高学年になればなるほど、「上手になりたい」「速く走りたい」「勝ちたい」といった気持ちが高まります。それを先生がどうとらえ、どう支援していくのが大事になってくると思います。

松田 発達段階に応じて体育の内容をとらえ直していこうといった場合に、例えば、3年生ならこのぐらいの身体能力とか技能だとか、そういうものが例示されたりする可能性があると思いますが、そのあたりはどうですか。

杉本 どの運動でもコアな部分があると思いますが、そのコアな動きを身につけさせるために、いつどういう時点でどういうふうにならなければならないのか、これがつまり発達段階に応じてということにつながると思います。いつ教えるのか、体育の構造を明らかにしなければいけないし、学習指導要領を熟読しながら言葉を拾っていき、構造、系統性、そして発達段階を考えていったらいいのではないかと思います。

山口 私もそのように感じます。「例示」に出てきたものをしっかりと受け止めて、今の子どもたちの実態に応じてどういう内容をどの学年で提供し、卒業時にどういう子どもにするのかということ、これを体育に携わる先生が中心になって学校ごとに決めていくことが大切だと思います。

杉本 例えば、低学年のゲーム、中学年のバスケット型ゲーム、高学年のバスケットボールの中でディフェンスを考えた場合、「相手のボールになったら自分のコートに戻る」とか「ゴールとボールの間に立って守ること」などを、いったいいつどこでどれくらいのときに助言し、身につけさせるといいのか、ディフェンスの技術も発達段階に応じた系統性、いつどこで何を教えるのかを分析するとわかりやすいのかなと思います。

松田 一方で、それが先に出てしまうと、子どもを1つのルールにはめ込んでしまうということが授業で起こらないか、という疑問もあるのですが。杉本 すべてを教師が子どもに教えていくのではなく、子どもたちが作戦を立てるときやなかなかうまくいかないときに、次のステップ

をアドバイスのという意味で、教師は引き出しをたくさん持ち合わせ、いつでもそれを出せる状況にありたいですし、出す場面は教師の判断ということになると思います。

山口 それと、授業の質の問題ですが、小学校教員のだれもが体育が堪能なわけではありません。しかし、どの先生が指導しても、ある一定レベルの授業を学校全体で保障していかなければならないと思います。もちろん教師は、研修を通して、子どもの実態に応じた指導法を身につけていくことも大事なのかなと思います。

松田 ゲームが発展していくプロセス、初心者ならここまで、中級者ならここまでという一般的なプロセスというのはありますね。ただ、すべての子どもたちを押し込めていくというのではなくて、一般的というものを、教師から見ても子どもたちから見てもそうだとことを確かめながら、運動の特性との関係の中で、技術と子どもたちの発達段階を考慮して授業づくりをしていかなければいけないということですね。

杉本 今回出てきた「知識」というものにもかかわってくるかと思いますが、やはりわかってできるという部分も多いと思います。例えば、低学年の表現リズム遊びで、まったくリズムにのれない子に何を教えたらできるようになるのか、「おへそを上下すること」とか、「ひざを柔らかく使うこと」とか、「手拍子する」など、そういったちょっとした助言でリズムにのれるようになったりします。ですから、できるようになるための知識、「わかる」ということも必要なのかなと感じます。

■「ミニマム」と「アカウンタビリティ」

松田 学習指導要領の改訂をめぐる議論の中で、学校というのは国民の税金を受けて子どもを育てるといった社会的役割を担っているところなので、小学校1年生であずかった子どもを高校卒業時までどれぐらいの力をつけて育てるのか、ということを保護者に説明できないといけないということがいわれていますが、そういったことについてお考えになられること、あるいは何か提言したいことなどありますか。

杉本 先生がお話されたことはミニマムということだと思います。高校を出たときに最低限だれもが身につけるべきものとしてミニマムという言葉

が出てきたと思いますが、どうなのでしょう。地域や学校のさまざまな実態を考えると、学校でのミニマムとか地域や県、市のミニマムなどが検討されてもいいのではないかなと思います。

山口 私の学校の例ですが、さか上がりを全員できるようにさせて卒業させるという目標を定めて取り組んだことがあります。結果として8割ができるようになって卒業したんですが、そのときの保護者の印象は、普段の会話の中でもさか上がりのお話が出てきましたし、何よりも大事なのはできるようになるために、休み時間など先生も一緒になって取り組むんですね。授業研究会でも意見を出し合ったりして、地域の保護者の方々に高い評価をいただきました。8割ができてあと2割という難しい状況があったのですが、子どもたちの実態を見て、学校でここまでもっていきますという目標を定めて取り組むことが大事になってくると思います。

松田 つまり、学校全体で目標を定めて取り組むことがアカウンタビリティを果たすことにつながったということでしょうか。ただ、それは一律なものなのか学校別に定めるものなのかは、弾力的な部分があってもいいのではという意見もあります。ただ、残りの2割の子どもたちはどうなるのでしょうか。

山口 そこが非常に難しい問題で、全員できるようにするために取り組んではいますが、なかなか難しい。一概にここまでという目標を設定することの難しさがあるんですね。

杉本 だから単純に数値的な目標は出せないということになります。残りの2割の子たちは生涯スポーツにつながらなくなってしまいかねません。公園で鉄棒を見てもやりたい気持ちにならない可能性もありますね。

松田 残りの2割の子たちが運動から離れていってしまうとなると、アカウンタビリティに対する意識は高まったけれど、教育の実質は貧しくなったということになりかねないですね。

杉本 ですから数値的目標ではなく、1人ひとりの実質の高まりで子どもたちを見ていってやりたいですね。

山口 また、その質の高まりを保護者に説明するのは難しいですよ。目の前のできる・できないというのが評価になりますので、初めはこうだ



ったけれども、ここまでできるようになったんですよと説明しても、わかっていただくのは難しいですよ。保護者にも納得してもらおう形で提供していくのがこれからの課題だと思います。

松田 運動の楽しさをめざした体育の授業づくりでは、ここまで子どもを高めましたという評価の視点は説明しにくいんでしょうかね。

山口 高めました、ということに関しては、いちばん説得力があるのは、できるようになったということ、これに勝るものはないと思います。

杉本 子どもにとっても、できたときや記録が伸びたときなどが喜びにつながるとはありますが、やはり数値的に現れないところでも、例えば、表現でやさしい動きから難しい動きができるようになったとか、それこそ今までリズムにのれなかったのが、のれるようになったとか、それが数値ではなく目に見えて現れていたり、子どもが運動や体育が好きになったりということになれば保護者にも説明できると思います。

松田 そういう意味では、保護者にも体育の授業で子どもはこんなに変わりましたよ、ということを発信していくことが大事なのかもしれませんね。

山口 発信のしかたということであれば、学校のオープン参観等で体育の授業を生で見ただく、学校通信で取り組みやこんなふうにできるようになりましたということを発信していくことが大事になるかと思います。

松田 ミニマムという言葉で議論されている、最低限これだけはこの量的な問題と、子どもがこんなふう運動に親しむようになったという質的な問題は、プラスαで重ねていって各学校、各授業で工夫していくという組み合わせが大事なのかもしれませんね。

山口 ミニマムというのは、学校全体でとらえるのもあるかと思いますが、個人のミニマムもあるかと思うんです。例えば、新体力テストでいえば、

去年の目標からこれぐらいまで高めるようにするという個人個人の目標を定めるというものであれば可能なこともあると思いますね。本年度の新体力テストの結果を入力すると、来年度ここまで高めようという自分の目標が出てくるソフトがありますが、それに向けて取り組んでいくということはできると思います。

■「体力低下」とこれからの授業づくり

松田 体力低下の問題はよくいわれていますが、現場でも数値とは別にお感じになれることはありますか。

杉本 昨年と今年を比べて如実に感じることはありませんが、ひと昔前の同じ学年の子であればできていた動きが、最近の子どもはできないということはありません。

山口 1年生の体力テストにかかわってみて感じたのは、これまででもまっすぐ走れない子どもはいましたが、その数が確実に増えていると思います。レーンで区切ってここをまっすぐ走るんだよといっても走れない。自分が曲がって走っているということ認識できない子どもが増えているのを目の当たりにすると、子どもの体力低下の問題は幼児期からの問題なんだなと感じますね。

杉本 いま「^{さん}三間」(空間・時間・仲間)の確保といわれているように、子どもたちの遊ぶ機会が減っています。うんていを渡るのを見ても、腕の力が落ちていると感じます。自分の体を支えることも難しくなっているのです。

松田 やはり運動経験の貧しさというところからスタートしてしまっているのかもしれないね。

杉本 幼児期に運動しようという動きが最近あるようですから、そういったことを増やして、親子でできる運動を増やしていくのも必要ではないかと思いますよね。

山口 6年生で今取り組んでいる実践例ですが、

体力向上プログラムということで、バランスボール、綱引き、なわとび、さらに埼玉県で出している運動例を選んで、子どもたちがバイキング形式でローテーションさせて自分の体力の高まりを感じさせて卒業させようと、いま授業で行っています。こうした授業がそれぞれの学年の発達段階に応じて大事になってくるのではと思っています。

松田 そういう意味では子どもたちの学習に向かうモチベーション、気持ちというものを第一に考えて、結果的にそういうものが高まっていくことに対して先生方がうまくかかわっていく授業だといいい、ということですね。

杉本 そうですね。子どもたちがそういう意識を高められるようにどう教師が仕掛けをするか、調味料を加えるかということが大事になってくると思います。

山口 学校という場で、教育者である教師が運動を提供するわけですから、地域のスポーツクラブや放課後の遊びとは違った調味料、エッセンスを中に加えて、先生とやるとこういう楽しいことができるんだよという魅力ある授業を提供していくということがこれからの体育に大事なのかなと。そのなかでやはり私が心がけたいのは運動量をきちっと確保してやりたいこと、その運動量とは身体全身をとらえての運動量だということ、あとはだれもが楽しめる工夫が大事になってくると思います。

松田 お話を伺っていると、内容をはっきりとさせていくという方向にいくとしても、昔のトレーニングみたいな体育に戻りそうにないかと、非常に今日は安心しました。最後に、これから体育の授業はこんなふうになっていけばいいとか、子どもと運動の関係はこうなってほしいから、学校としてはこういうことに力を入れなくてはいけないといったことについてお考えになっている

ことをお話いただきたいのですが。

杉本 これだけ体力低下が叫ばれています。いかに子どもたちの運動する機会を増やすかということでは、体育で行ったことを休み時間でもそのまま行ってみようという具合に、いかに生活と密着できるかということが大事になってくると思います。ですから、体育の年間カリキュラムの立案に際しても、休み時間にその運動に取り組める環境を考慮するなどして計画してはどうかと思います。そうなれば、必然的に授業でやったことを休み時間にやってみたり、友達を誘ってやってみたりします。友達とのかかわりも広がったり、遊びも工夫されたりして、それが体力向上にもつながっていくのかなと思います。

山口 三つの間の話がありますが、その核になるのが体育授業になるのかなと感じます。どれも授業では確保されていますので、体育の授業で行った内容が生活化していく、そういった体育授業をしていきたいと感じています。そのためには、多くの遊びができるような環境を教師が工夫して、ある程度備えてあげることが大切です。体育でやったことがそのままスッと遊びの中に入って自然と結びついていく、これが私の理想とする子どもたちの姿です。何より私自身の評価として見るのが、授業の始まる前と終わった後なんです。終わった後も、「先生まだやりたい」と子どもたちが言う。こんな授業ができると、子どもたちの運動も豊かになっていくのではないのでしょうか。そして結局は体力低下も止める大きなキーワードになってくると思います。

松田 いま学習指導要領の改訂の最中ですが、今後もその中身を受けまして、先生方にはこれからの体育の授業のあり方をリードしていただきたいと思いました。今日はどうもありがとうございました。 ■

●座談会を終えて／松田恵示

お二人の先生との座談会を終えて感じたことは、「子どもの側から体育の学習をとらえるということ」＝「運動の特性を大切にしたい授業づくり」というものが、しっかりと根づいているということである。大人の側から考えてみれば、確かに身につけてほしいことがたくさんある。またそういうものを体育科の意義として強調することも、学校という教育制度が社会的なものであるだけに必要なことであろう。

しかし、実際に体育で「学ぶ」ということを行う当の子どもの側から、そういった学習のあり方やその指導のあり方が考えられなければ、何十年か前の強制的な体育に戻ってしまうだけである。学習指導要領の改訂がこれから本格的になる時期だけに、現場にいる私たちが深く受け止める必要のあるスタンスであると、あらためて思わされた座談会であった。(まつだ・けいじ)

ボール運動のためのコーディネーション運動

その2

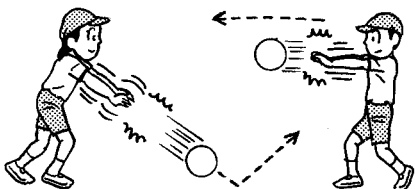
今回はボール運動の中でも、バスケットボールやサッカーなどのゴール型ゲームに生かすコーディネーション運動を紹介します。まず、ゴール型ゲームの特性を2点あげます。1点目は、ゴール型ゲームの攻撃では、味方どうしが動きながらパスをつなぎ、相手ゴールに迫ります。さらに、相手の防御をうまくかわしながらという課題が加わります。これをコーディネーション能力の視点で見ると、周囲の状況を把握する**定位能力**、味方への正確なパスをする**識別能力**、ボールや相手の動きにすばやく対応する**反応能力**、そしてスムーズにパスをつなぐ**リズム能力**が主に必要となります。

2点目の特性は、味方や相手を見て、周囲の状況を把握して動いたりパスをしたりします。視覚によ

る情報収集をして手や足を使ってパスをします。この神経系の過程こそが、コーディネーション能力の開発に深くかかわっています。私たちの感覚のうち、視覚からの情報が約90%を占めるとわれています。うまくできない子どもの多くは、どこを見ていいのかわからないか、何をしたらいいのかわからないため、よく見えていないのです。つまり、**見て・判断して・行う**という運動回路の入り口でつまづいています。

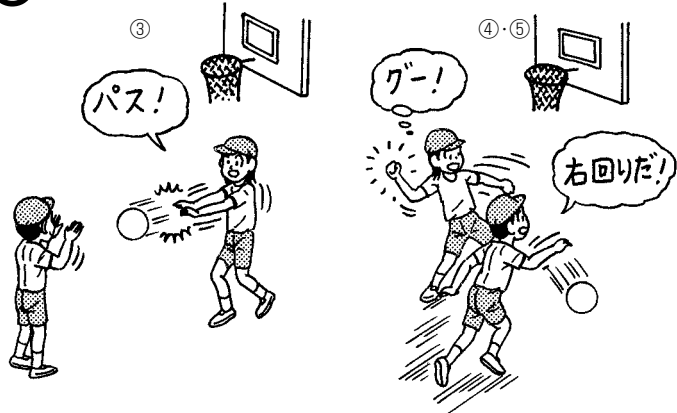
ボール運動を指導する場合、パスやシュートといった技能を習得してからゲームを行う方法がよく見られます。ここでは、ゴール型ゲームの特性と運動回路のしくみをふまえ、コーディネーション運動の観点から子どもたちが知らず知らずボール運動が上手になる運動例を紹介します。

① リアクションパス



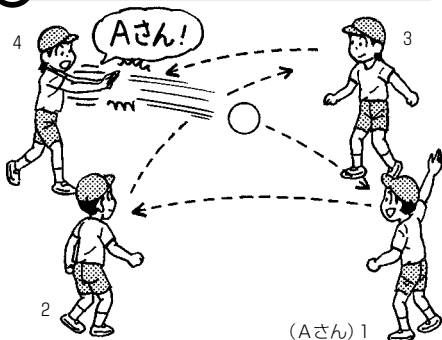
- ◆**ねらい**：反応（相手のパスにすばやく対応する）、識別（2種類のパスを使い分け、キャッチする）、リズム（相手のパスのタイミングに合わせる）能力の開発
- ◆**やり方**：①2人組になり、それぞれがボールを1個ずつ持ちます。②一方がリーダーになり、リーダーがバウンドパスをしたら、他方はチェストパスをします。その逆も行います。③お互いにステップをしながら行います。④慣れてきたら、お互いの間隔を狭めたり、フェイントを入れたりします。
- ◆**ポイント**：相手の動きではなく、ボールをよく見るようにします。そのために、初めは止まった状態で行います。相手の手や顔の動きに焦点を合わせると、フェイントにかかりやすいためです。

② リアクション1対1



- ◆**ねらい**：反応（相手が出す合図に正確に対応する）、変換（右か左か、すばやく動きを切り換える）、識別（キャッチ・ドリブル・シュートの際のボール操作）能力の開発
- ◆**やり方**：①ゴールの数にグループ分けします。②バスケットボールの場合、ゴール下とフリースロー付近に分かれます。③ゴール下の人がボールを持ち、フリースロー側の人へパスをします。④パスをすると同時に3、4歩サッと前に出て、手でグーかパーを出します。⑤フリースロー側の方は、グーのときは右に抜いてワンドリブルでシュートします。パーは逆になります。
- ◆**ポイント**：攻撃側の方は、防御する人の動きを、止まってよく見て判断する感覚を養います。初めは、右か左かにワンドリブルで抜くという、二者択一の課題から行います。慣れてきたら、選択肢を3つにします。

③ ナンバリングパス



- ◆**ねらい**：定位（周囲を見て、どこに動くのか）、リズム（グループでテンポよくボールをつなぐ）、識別（動いている相手に正確にパスする）能力の開発
- ◆**やり方**：①4人のグループにボール1個から始め、徐々に人数を増やします。②グループ内で、パスをする順番を決めます。③パスをする人は、次の人の名前を呼んでパスをします。④受ける人は、手を上げて声で自分の場所を知らせます。⑤慣れてきたら順番を逆にしたり、パスをした人のところに移動したり、バウンドパスで行ったり、ボールを2個にして行ったりします。
- ◆**ポイント**：初めは全体をぼんやり見ながら（間接視野）、パスをする人とパスがくる人を交互に見るようにします（直接視野）。どうしてもボールを目で追いかける傾向が強いため、全体を見る意識が必要です。慣れてきたら、逆にも挑戦しましょう。バウンドパスも重要です。子どもたちは、上に投げるケースがほとんどです。バウンドパスは、防御側が守りにくく、味方に正確に届きやすい特長があります。（あずまね・あきと）